

個人と社会のつながり方を考慮した住宅の計画について

兵庫県立大学 環境人間部 准教授 安枝英俊

戦後のわが国の住宅計画は、基本的には、夫婦と子供による核家族を対象として進められ、核家族に対応した住宅として、いわゆる nLDK 型といわれる住宅がこれまでに大量に建設・供給されてきました。nLDK 型の住宅は、核家族における夫婦の同室就寝、他の家族構成員の分離就寝を満足した上で、様々な生活行為を家族と一緒にを行うための居住空間であったと捉えることができます。

しかし、少子高齢化、単身者の増大、家族の多様化により、子育て終了後の夫婦ふたりでの生活、単身者での生活、血縁関係にない単身者同士の共同居住、親の介護をしながらの生活など、nLDK 型の住宅が想定していなかった生活をする世帯が増加しています。こうした世帯では、家族の構成員それぞれの生活の独立性が高く、家族同士の関係だけではなく、個人と社会のつながり方を考慮した住宅の計画が求められます。

また、近年は、住要求が多様化するだけでなく、人生 100 年時代といわれるように、人の一生が長くなっています。とりわけ、高齢期になると、自宅で過ごす時間が長くなり、自宅にとじこもりがちになってしまいます。さらに、心身状況が衰えてくると、自宅で生活することが困難になるだけでなく、庭に出て過ごすことや、友人や知人と交流する機会がますます減少します。コロナ禍ではこの状況はより一層進行しています。

近年、フレイルという「加齢により心身が老い衰えた状態」という言葉が取り上げられますが、フレイルは、早く介入して対策を行えば元の健常な状態に戻る可能性があると言われていています。高齢期になっても、意識的に庭に出て植栽を楽しみながら過ごすことや、感染症対策を講じた上で、親族や友人を自宅に招くなどひとつにつながる機会をもっておく必要があります。また、かつての日本の住宅には、縁側や濡れ縁といった、住宅の内部の空間と庭を緩やかにつなぐ空間があることで、親族や友人だけでなく、通りすがりの近隣の住民と挨拶や会話をするといったことが実現していました。このようなことを踏まえ、今回の講演では、個人と社会のつながり方を考慮した住宅の計画について、事例を取り上げながら紹介をさせていただきます。

一方で、コロナ禍においては、在宅勤務や自宅でのオンライン学習が導入されるなど、住まい方が大きく変容しています。コロナウイルスに限らず、今後の住宅計画においては、社会あるいは個人や家族に対して、想定していなかったリスクが発生した場合における対応力が求められます。講演の中では、不確実性に対応することを考慮した「シナリオ・アプローチによる住宅計画手法」とその実例についても紹介をさせていただきます。

略歴

安枝英俊 博士（工学）、一級建築士 1973 年生まれ

1997 年京都大学 工学部 建築学科 卒業

1999 年京都大学大学院 工学研究科 建築学専攻 修了

2005 年京都大学大学院 工学研究科 建築学専攻 博士後期課程 修了

2005 年京都大学大学院 工学研究科 助手（2007 年より助教）

2013 年 兵庫県立大学 環境人間学部 准教授 現在に至る